

新たなコロナ派生型 BA.4.6 や BQ.1.1、米欧でじわり拡大

2022年10月18日日本経済新聞

新型コロナウイルスの変異が進み、オミクロン型の新たな派生型が米欧などで拡大しつつある。米国では「BA.4」に変異が加わった「BA.4.6」が新規感染者の約12%まで増加。現在主流の「BA.5」から派生した「BQ.1.1」なども各国で広がる。感染の再拡大につながる可能性もあるが、検査体制の縮小で各国の流行状況は把握しづらくなっている。

オミクロン型の様々な派生型が広がる		
派生型	見つかった主な国	特徴
BA.4.6	米国、英国、カナダ、デンマーク、フランス、豪州、ドイツ、日本など	・「R346T」「R493Q」など共通や類似の変異がある
BA.2.75.2	米国、インド、シンガポール、豪州、英国、カナダ、ドイツ、日本など	・BA.5より免疫をすり抜ける性質が強く、感染が広がりやすい可能性
BE.1.1 (BQ.1.1 など含む)	ドイツ、米国、デンマーク、英国、フランス、日本、オランダなど	・試験管レベルの実験ではワクチンの抗体が効きにくく、抗体薬の効果も低下

南アフリカが新たな変異ウイルスとしてオミクロン型の出現を報告してから1年近くたった。世界各国でオミクロン型の流行が続く中、新たな変異を獲得した派生型が次々と登場している。現在主流のBA.5から徐々に置き換わりが進んでいる。

米疾病対策センター（CDC）の推定によると、米国では8月半ばの新規感染の9割近くがBA.5だったが、10月9～15日のBA.5の割合は約68%まで低下。BA.4.6は約12%で、8月7～13日の約6%から2倍に上昇した。BA.5に変異が加わった「BQ.1」とBQ.1.1もそれぞれ6%弱、「BF.7」も約5%まで増えている。

米ベイラー医科大学のホーテズ教授は今後の米国の感染状況について「**欧州での動きを参考にすると、マスク着用義務の撤廃などの規制緩和が11月にかけて感染拡大を招く。その後、BQ.1.1の波が到来して主流になる可能性が高い**」と指摘する。

一方、英保健安全局は9月25日時点のイングランド地方ではBQ.1やBQ.1.1を含む「BE.1.1」系統が約18%、BF.7とBA.4.6がそれぞれ7%前後、「BA.2.75.2」を含む「BA.2.75」系統が約5%などと推定する。BA.5以外の系統が4割程度を占め、なかでもBE.1.1は感染拡大のスピードがBA.5よりも30%程度速いと分析する。

これらの派生型は欧州やアジアの複数の国のほか、日本でも見つかった。シンガポールなどでは2種類の派生型の遺伝子配列が混ざった組み換えウイルス「XBB」も確認さ

れた。今後どのウイルスが優勢になるのかは国によって異なる可能性もある。BA.2.75は「ケンタウロス」の俗称でも知られるが、BQ.1.1は「ケルベロス」、XBBは「グリフォン」などと一部で呼ばれる。

新たな派生型では、免疫をすり抜ける「免疫逃避」の性質がさらに強くなったと考えられている。スウェーデンのカロリンスカ研究所や中国・北京大学、米コロンビア大学などの研究によると、BA.4.6やBQ.1.1、BA.2.75.2は似た変異を持ち、ワクチンや感染によってできた抗体が効きにくい。抗体医薬品の効果も低下していた。

ドイツやフランスなど欧州ではコロナの感染者や入院患者が再び増加している。コロナが流行しやすい冬を迎える中、感染力の強い派生型へと置き換わりが進めば、再拡大の波が大きくなる可能性もある。ただ、派生型の重症化リスクは大きく変わっていないとみられ、オミクロン型対応ワクチンの追加接種にも一定の効果が期待される。

米政府はオミクロン型対応ワクチンの接種を呼びかけている。BQ.1とBQ.1.1への効果について、ファウチ大統領首席医療顧問は米CBSテレビのインタビューで「現在ある治療やワクチンの効果を回避できるような性質を持つかもしれないが、BA.5の派生型であるため効果はあるだろう」との見方を示した。

日本はBA.5による第7波がほぼ収束したばかりだが、専門家はいずれ第8波が来るとみている。水際対策の緩和によって海外のウイルスは国内に入ってきてやすくなった。ゲノム解析などで派生型の流行状況を監視しながら、コロナやインフルエンザのワクチン接種を進め、検査や医療の体制を再構築することが重要だ。

(ニューヨーク=吉田圭織、越川智瑛)